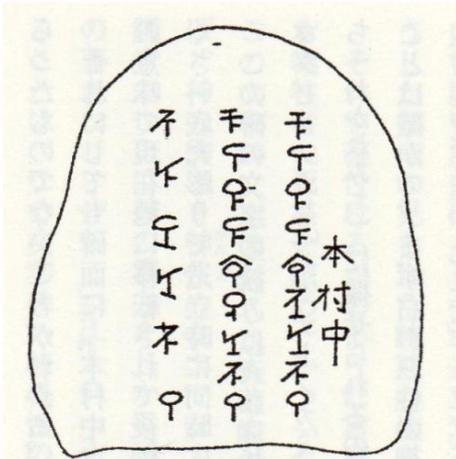


1. 本村大日堂前

(安曇野市豊科本村本郷)

(1)道祖神



神代文字碑の碑文



美しい双体道祖神



巨大な文字碑道祖神

①神代文字碑

- 神代文字碑の文字について
 - 碑文の三柱の神の名の性格
 - 神代文字碑を建てざるをえなかった時代背景 飢饉と騒動、そして鎮魂
 - 道祖神に転換できた理由
- [メモ欄]

②本村本郷の双体道祖神

- 道祖神の像碑の種類 本村のものは何にあたるか。
 - 像容から信仰を読み解く。
 - 碑陰の「帯代十五両」の意味とその背景にある習俗
- [メモ欄]

③巨大な文字碑道祖神

- 近世に造立された文字碑道祖神としては日本一とされる。巨大な文字碑をつくった理由として何が考えられるか。
- 碑陰に「弘化丁未秋改建 成相本村」とあるが隣の双体道祖神(弘化三年)とは1年

違いなのに建てた理由とは。

[メモ欄]

(2)庚申塔について



庚申塔(像碑)

□庚申塔は「供養塔」といわれるが、どういうものか。「供養塔」と道祖神碑の違い。

□像碑庚申塔から信仰の内容を読み解く⇒「日天・月天」「二鶏」「三猿」の意味。

[メモ欄]

(3)念仏供養塔について

□念仏講について

□本村本郷の念仏供養塔(寛政9年<1797>)の碑文に正道が揮毫した名号の他に「日課弟子中 三月仏縁日」とある。日課念仏をあらわす「日課」と念仏講をいつ催すかを暗示する「仏縁日」から知られること。

[メモ欄]

2. 穂高神社 安曇郡の総社的存在

(安曇野市穂高本郷)



穂高神社境内



祭神(中殿:穂高見命、左殿(向かって右):綿津見神、右殿(向かって左):瓊々杵尊

(1)本殿

□祭神 今は穂高見命、綿津見神、瓊々杵尊。別殿に天照大神。当初からそうか。

□本殿建築

[メモ欄]

(2)若宮と境内社



若宮



境内社と若宮(右の一番大きい社)

①若宮

□若宮に祭られている神について 阿曇比羅夫命 相殿 信濃中将(ものぐさ太郎)

□若宮と御船祭の関わり

②境内社

□八坂社 □事比羅社(金毘羅社) □子安社 □保食社 □四神社 □疫神社 □秋葉社

□八幡社 □鹿島社

[メモ欄]

(3)神宮寺跡



神宮寺跡に置かれた仁王石



仁王石の由来

- 神宮寺の存在は何を意味しているか
- 穂高薬師の存在
- 南北安曇で「神宮寺」を構えた神社に共通することは何か。誰が祭を仕切ったか。
〔メモ欄〕

(4)伝統行事



御船の構造(骨組)

- 御船祭り 民俗芸能上の区分は「^{ふりゆう}風流」の中の「^{ふりゆう}つくりもの風流」。安曇野で他に穂高神社の御船祭りに酷似する御船祭り(例大祭の山車曳行)の事例はどうか。
- 御奉射祭
- 式年遷座祭
〔メモ欄〕

(6)重要な文化遺産『三宮穂高社御造宮定日記』(穂高神社所蔵)

大妻内宮高は大妻の内宮高であらう。地名今廢すべし。大塔合衆大文字一掃中に高氏あり。

御柱一本	大穴龜郷所役	萩原(陸郷)	全五〇〇全	五〇〇全	全	五〇〇全	五〇
小宮	内全二〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全
平	内全二〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全
若宮	御實殿一字	犬甘嶋島内所役	全五〇〇全	五〇〇全	全	五〇〇全	五〇
南宮	内全二〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全
大宮	内全二〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全

大妻内宮高は大妻の内宮高であらう。地名今廢すべし。大塔合衆大文字一掃中に高氏あり。

各号類書の文字の上へ(三) 其が類書三之宮といふ説と、祭神が三神であるからだと、いふ説があるが、矢張り支書中にある通り大宮南宮若宮の三宮説の方が正しいらう。

明應八年つちのし九月六日

爲文□□ せ九ろ

穂高造營定書 其三

三宮 三宮穂高社御造營定日記 大宮分合 縣社穂高神社文書

御門屋	一字二階	住吉庄(里)所役	全五〇〇全	五〇〇全	全	五〇〇全	五〇
南宮	御實殿	北等々力(龜郷)所役	全五〇〇全	五〇〇全	全	五〇〇全	五〇
池田庄	科池田	全六三〇全	六三〇全	全	六三〇全	六三〇	六三〇
船方	松川	全四〇〇全	四〇〇全	全	四〇〇全	四〇〇	四〇〇
耳塚	明全三〇〇全	三〇〇全	三〇〇全	全	三〇〇全	三〇〇	三〇〇
橋	瓜(有)明全二〇〇全	二〇〇全	二〇〇全	全	二〇〇全	二〇〇	二〇〇
草	深(西穂高)全二〇〇全	二〇〇全	二〇〇全	全	二〇〇全	二〇〇	二〇〇
白	金(穂高)全一〇〇全	一〇〇全	一〇〇全	全	一〇〇全	一〇〇	一〇〇
柏	原(西穂高)全一〇〇全	一〇〇全	一〇〇全	全	一〇〇全	一〇〇	一〇〇
穂	高(穂高)全一〇〇全	一〇〇全	一〇〇全	全	一〇〇全	一〇〇	一〇〇

馬頭観世音(佛)内宮(未修)

須々岐(佛)は清和天皇貞觀元年(西暦八七〇)に修られた。佛者は是にて諸神を諸神に成す。そらへ、本地垂迹の説を爲す。

前々支書(其二)の通知が再び大祝に復職した詳だ。

永正四年丁卯二月四日

盛知 則知

佛像胎内銘

執筆 中河原知通

種高郷四至界ノ事、東ハ千國大道ヲサカフ、南ハ柏原新居ノ澤ヲサカフ、西ハ猪鹿牧ノ宮ノ窪ノ東ヲサカフ、北ハ上ノ草深ノ北ノハバサキ、下ハ御神路ヲサカフナリ

奉修造且那、馬頭観世音、須々岐御本地、明應十年辛酉六月、佛、

穂高造營定書 其四

三宮穂高社御造營定日記

(内容第二二〇號明應十年分と同文ニ付畧)

御見保は鎌倉時代御見保の遺名なり。北安江貴村の遺か。一説千見(美穂)とも云はる。

御柱神事ありし事は南宮(即ち御勢力の祖長を物語る)。

御門屋は政府御社務所であらう。

此前後とも大伴盛知が大祝であるに、此時だけ大祝清水宮奉行矢口氏(共に宮奉行出身)で、而して南宮奉行知通が執筆である、如何。

明應十年辛酉二月十二日

清水石見守盛好 矢口備前守知光

御柱一本	重柳(前穂高)針俣(二ヶ郷)所役	鎌太夫奉行
御柱一本	猪鹿牧(西穂高)抗戸(松川)多々井(三田)三ヶ郷所役	三月祝奉行
御柱一本	山本(降幡牧)二ヶ村所役	五月祝奉行
御島居内	田毛(七貫)狐島(北穂高)二ヶ郷所役	鎌太夫奉行
御島居一與外	堀金所役(島川)	鎌太夫奉行
御玉垣二方半	細野(松川)賀治尾毛(北穂高)板取(松川)二ヶ郷所役	鎌太夫奉行
御玉垣一方半	北大和田(松川)所役	鎌太夫奉行
御荒垣一方半	菅沼郷(當郷)所役	鎌太夫奉行
御荒垣二方半	細野郷(南穂高)所役	鎌太夫奉行
舞臺一字	前見保(七貫)所役	鎌太夫奉行
廳屋二間半	古麗郷(有明)所役	鎌太夫奉行
廳屋二間半	南等々力(龜郷)所役	鎌太夫奉行

「三宮穂高社御造宮定日記」の翻刻本

- 文中に登場する「大宮」「若宮」「南宮」の三つで「三宮」を意味する。
- 「南宮」と「御柱」の関係。
- [メモ欄]

(7)穂高神社と高島一翁、高島章貞



穂高神社境内の高島一翁筆塚



穂高神社境内の高島章貞歌碑

- 高島一翁、高島章貞と穂高神社の関わりについて
〔メモ欄〕

3. 有明山神社

(安曇野市穂高有明宮城)



裕明門の彫刻



有明講社本殿

(1)有明山神社の来歴

- 現有明山神社の原型となる三社大権現(みやしろだいごんげん)の存在⇒有明山神社がある現在の場所から東、字「橋場」(有明 7494 番地)に古い有明山神社の里宮が三社大権現(みやしろだいごんげん)の呼称で存在した。「大権現」ということから「別当寺」(神宮寺)の存在が浮かび上がる。その寺とは何寺か。
- 倉田為吉(天明行者)により里宮創設、鳥居設置。天明行者の石像が古い有明山神社の

里宮の跡地に残る。三社大権現（古い有明山神社）は大正元年(1912)に現有明山神社に合併(『長野県神社明細帳』による)。

□神威が上がらないのを憂いた岡村阜一による有明山神社再興→有明講の普及 具体的にどういう手段で普及したか。

□信濃日光 「信濃日光」と呼ばれた所以は何か。

□藤森桂谷の関与 彼は有明山神社のためにどういう貢献をしたのか。

[メモ欄]

(2)祭神と特殊な祭式

□手力雄命、天鈿女命、大己貴命、八意思兼神。本来有明山が神体山のため本殿はない。しかし写真に掲げたように有明講社本殿があるが、これはどうしたことか。祭事のやり方は「神体山形式」。これと同じやり方の著名な神社には何社があるか。

[メモ欄]

(3)文化遺産



裕明門



手水舎



有明山登山記念の碑

□裕明門 明治35年建築。日光の陽明門をまねている。彫刻の制作者について。

- 手水舎 飛騨の匠の作。紅梁、天井に美しい彫刻が彫られている。
- 神楽殿の天井絵 藤森桂谷の尽力により橋本雅邦「鳥」など
- 『残月集』
- 境内にある有明山登山記念の碑 有明山登山の意義は。
〔メモ欄〕

4. 満願寺 (真言宗)

(安曇野市穂高牧栗尾山)



満願寺本堂



本堂内部

(1) 来歴

- なぜわざわざ人里離れた場所に建てたのか。
- 弘治 2 年(1556)の勸進沙門による栗尾山精舎再興状 「本寺は坂上田村麻呂の創建」「本尊は地中から湧出した千手観音」「本堂の前を三途の川が流れ、罪障の重い人は渡れない」「左右の山は死出の山で道が六つに分かれ百三十六の地獄がある」「東北の鬼門にある毘羅樹には罪障人が死後集まってくる」「一度本寺に参詣すれば罪障を消すことができる」この口上の文脈から読み取れること
- 松本藩主の庇護 慶安 4 年(1651)の検地では寺領 77 石を与えられている。松本藩主はこの寺を領民にとってどんな場所と位置付けたか。
- 江戸後期には観光的にも著名な寺院⇒十返舎一九『続膝栗毛』(文化 13 年)、豊田利忠『善光寺道名所図会』(天保 14 年)に満願寺のことが書かれている。栗尾街道(近世の呼称「栗尾道」)が満願寺へ向かう参詣道・観光の道として使われ、篤志家による道標が整備。
- 廃仏毀釈による廃寺
- 再興 これだけの大寺を再興するのは大変だったが、再興の中心人物は高家村の人物だった。
〔メモ欄〕

(2) 伝統



満願寺をめざす栗尾街道(栗尾道)



地獄極楽変相之図

- 8月9日の観音縁日における新仏迎え 住民は新仏を迎えに行くのに栗尾街道(栗尾道)という参詣道を使うのが、かつての習わしだった。なぜ8月13日の迎盆でなく、この日が選ばれるのか。また新仏を連れて来た際に、家ではどんな迎え方をするか。
- 本堂における地獄極楽変相之図の絵解き
〔メモ欄〕

(3) 文化遺産



微妙橋



聖天堂

- 微妙橋 欄干屋根付太鼓橋(橋長 13.05m、幅 3.6m)。手前に六地藏を配し、対岸に地藏堂を配置する。この情景は何を意味するか。
- 聖天堂 唐破風の軒、柱などに繊細な彫刻が施されている。堂内には歓喜天が安置されている。聖天堂が安曇野でもう一箇所設けられているが、それは何寺であるか。
〔メモ欄〕